
金刀比羅宮本「なよ竹物語絵巻」に関する一考察
—似絵との関係性を中心に—

金刀比羅宮本「なよ竹物語絵巻」(以下、金刀比羅宮本)は、後嵯峨院(1220-1271)に纏わる好色譚を描いた絵巻物である。金刀比羅宮本は、鎌倉時代末期という絵巻物興隆期の作品でありながら、未だ美術史上における確かな位置づけが与えられていない。先行研究においては、時代の経過による図像表現の硬化と衰退への指摘が繰り返され、金刀比羅宮本の持つ図像上の特徴が看過されてきた。

金刀比羅宮本の性格を明らかにするために、最初は、人物の顔貌表現を考察する。金刀比羅宮本の男性貴族の顔貌描写には、引目鉤鼻による表現と、上瞼と下瞼を引き分け個性的に描いた表現が混在する。これら個性的な貴族の顔貌描写を、先学は似絵風と称し、一部の貴族については列影図中の同一人物の顔貌との近似を指摘している。しかし、他の貴族については似絵風なのか、本人の顔貌を意識して描いた似絵なのかについて明確な言及はなされていない。発表者は、これらの貴族の顔貌を、列影図を用いて比較し精査した結果、先学の指摘した人物以外にも似絵で貴族が描かれている事実を明らかにした。また、第一段の貴族の中には、金刀比羅宮本の物語内容には無関係の西園寺実氏(1194-1269)が描かれていることを特定した。実氏は、金刀比羅宮本の主人公後嵯峨院の政権を支えた重臣の一人であり、関東申次として活躍し権勢を振るっていた。物語には登場しない実氏個人が描かれている事実から、金刀比羅宮本の制作に西園寺家が関与した可能性をあわせて指摘したい。

以上の検討を踏まえて、似絵と金刀比羅宮本との関係について、構図や主題の観点から考察を行う。まず、第一段に描かれている実氏の姿勢と衣服、畳に座している点は、列影図における天皇の表現を参照している可能性が高い。次に、第二段で参考にされたのは、「中殿御会図」の構図であると考えられる。「中殿御会図」には等軸測投影法が用いられたが、金刀比羅宮本では斜投影法に変更されている。鎌倉時代末期の宮廷絵所で制作された絵巻物は、斜投影法を多く採用する傾向があるため、「中殿御会図」の構図を第二段に転用する際に、同時代絵巻の構図の枠組みに似絵を組み込もうとしたと考える。また、第一段は蹴鞠、第二段は管弦の場面を描くが、似絵は行事や技芸が主題の作例が多いことから、金刀比羅宮本に似絵を組み込むのに相応しい場面として、これらの段が構想されたものとする。すなわち、金刀比羅宮本は顔貌表現に留まらず、構図や主題においても似絵を強く意識していると言えよう。この試みには、似絵を用いることで出来事と実在の関与者の真实性を強調しようとする狙いがあったと考える。

以上のことから、金刀比羅宮本は物語絵巻でありながら、似絵の作品としての側面をも打ち出そうとしていることが明らかとなった。その上で、金刀比羅宮本の性格と制作意図について、絵巻制作時に後嵯峨院に示された評価を踏まえて考察し、歴史的な位置付けを試みる。